

# 平成 26 年度入試の出題の意図・採点総評



北九州市立大学

## 一般選抜

外国語学部	.....	P 1
経済学部	.....	P 4
文学部	.....	P 6
法学部	.....	P10
地域創生学群	.....	P12
国際環境工学部	.....	P13

## 推薦入試

外国語学部	.....	P23
経済学部	.....	P24
文学部	.....	P25
法学部	.....	P27
国際環境工学部	.....	P29

## A0 入試

外国語学部	.....	P37
地域創生学群	.....	P37

# 平成 26 年度入試の出題の意図、採点総評 《一般選抜》

## ◆ 外国語学部 前期日程（英語）

### <出題の意図・ねらい>

試験では高等学校卒業程度の基礎学力とともに英語読解力、英語表現能力を判定する。

#### 問題 1

長文を正確に読めるか問う。ヒラリーとテンジンがエベレストに初登頂してから 60 年を迎える今、エベレスト登山を巡ってどのような問題があるかを扱う英語エッセイを読み、内容を正確に理解できているか(問 1)、指示語が正確に読み取れているか(問 2～問 3)を問う。

〒

#### 問題 2

長文を正確に読めるか問う。シェールガス革命が世界的規模でどのような影響を及ぼすか、特に原子力エネルギーへの依存が落ちた日本にどのような影響を及ぼすかを論じた英語エッセイを読み、内容を正確に理解できているか(問 1)、空欄に正しい語を推測して入れられるか(問 2)、指示代名詞が何を指すかわかるか(問 3、問 5)、英文が正確に日本語にできるか(問 4)を問う。

#### 問題 3

和文英訳。与えられた日本語の文を正確に英語に訳す力を 2 問、問う。

#### 問題 4

英作文。与えられた英文のテーマに従って、短いエッセイを英文で書く力を問う。

### <答案の特徴と傾向>

#### 問題 1

問 1 は記号で答えさせる問題で比較的良好にできていた。

問 2 の指示語 **still more** が何を指すか。できが悪かった。**climbers** が出ない受験生が多かった。前の文章をそのまま抜き出した答案が多かった。

問 3 の指示語 **the trio** が何を指すか。全体的に正解率が高かった。的確に答えられず、無用なことに言及したり、指しているものに不足する内容だったりという答案も見られた。

#### 問題 2

問 1 は記号で答えさせる問題で比較的良好にできていた。

問 2 は空欄に正しい語を推測して入れられるか。もともと正答率が高かった。

問 3 は指示語 **this gap** が何を指すか。**gap** について何と何の差というとらえ方ができていなかった。指す部分の基本的な単語を理解していない受験生が多かった。

問 4 は英文が正確に日本語にできるか。スペルの似ている単語と意味を取り違える例が多かった。正解率は非常に低かった。

問 5 は指示語 **other players** が何を指すか。正解率が低かった。中東を **Middle Eastern** と誤記する受験生

が非常に多かった。英語での解答を求めているのに日本語で答えている者もいた。

### 問題 3

(1) 再生が **fresh start** ときちんと把握されていなかった。単複を対応させられないとか、主語動詞を揃えられないといった単純な誤りが多かった。

(2) 良好な答案が多かった。**translate** という単語が出たかどうかで点数的に大きな差がついた。「今回」という表現を書き忘れた受験生も多くいた。

### 問題 4

意見を述べるため多くの例をあげて、個人的体験に基づく立派な記述をする受験生も時々見られた。全体的に文法的過ち（特に主語動詞の不一致）が多く、同じ内容の繰り返しが多く、多数のミススペリングが見られた。

## ◆ 外国語学部英米学科 後期日程（小論文）

### <出題の意図・ねらい>

#### 問題 1

問 1 イギリスの中年の女性がオリンピックについての思いを語っている文である。英文がかなり複雑な箇所もあり、話の流れがきちんと把握できているかどうか、また英語がきちんと読みこなせているかを問う問題である。

問 2 筆者のスポーツに対する意見について、自分なりの議論を順序だてて論理的に展開できるかどうかの評価のポイントとなる。

問題 2 裕福な先進国では広告が氾濫しているが、そういった氾濫している広告が社会に与える影響というテーマで各自の意見を問う問題である。自分の論を支持する根拠を明確に出せるか、それを論理的に英文として表現できるかがポイントである。

### <答案の特徴と傾向>

#### 問題 1

問 1 概して的外れな解答は少なかった。全体を十分によく把握でき、キーポイントになる文や語句を上手く抜き出すことが出来、それを上手く所定の字数に纏めることが出来たかどうか、得点の分かれ目となった。

問 2 筆者は、女性とスポーツという視点からと、現代社会と人間の肉体という視点の二つの点から論じている。ほとんどの答案がこれらのテーマにある程度触れて自分の見解を述べてはいるが、筆者の主張を十分にくみ取って、それに応じている答案は極めて少なかった。

#### 問題 2

語彙不足、「a」と「the」の誤用、設問に対して的外れな解答が一部で見られた。しかし、具体的な例を挙げ、論理的で、自分の意見をはっきりと述べた、良く纏まった英文が多かった。

## ◆ 外国語学部中国学科 後期日程（小論文）

### <出題の意図・ねらい>

この問題は、論題の記述内容が的確に把握できているかどうか、そして自分とは異なる文化や慣習を持つ人々に対して、身近な出来事を、その背景も含めて客観的に述べられるかどうか、即ちコミュニケーション力の重要な素地の有無を問うたものである。

### <答案の特徴と傾向>

「信頼」や「信頼形成」に対する筆者の知見・見解を的確に捉えているかが回答の可否のポイントとなった。また問 2 の回答については、視点がユニークでしっかりとした論拠を提示出来ている回答が多かった。但し、まれに論述の展開の中で論拠が薄弱ないしは適切ではない回答もみられた。

## ◆ 外国語学部国際関係学科 後期日程（小論文）

### <出題の意図・ねらい>

この問題では、受験生が社会にどれほど関心を持っているかを図るために、フェアトレードに関するテーマを取り上げた。受験生にとって日常生活で外国製品を使う機会は多いであろうが、その製品がどのようにして生産されているのか、普段注目することはほとんどないと思われるので、本問題の出題で考察する機会を与えて社会に対する洞察力を図ってみようということである。

資料 1 では、フェアトレードの概念としくみについて説明されており、その意義として「生産者と消費者の直輸入システムを作り、南北の不平等な関係、営利一辺倒の自由貿易のあり方を見直し、生産者と消費者の関係を顔の見える人間同士のつながりにかえようとする」ことが述べられている。これは理想論であるが、現実には理想通りに行かないことが往々にしてあり、資料 2 では経済学者などの反対論が展開されている。日本のフェアトレードの現状について論じている資料 3 では、フェアトレードがあまり認知されておらず、本来市民による社会活動として行われるはずのフェアトレードが一部の大企業によって実施されたことが述べられている。

受験生にはこれら 3 つの資料を読んだ上で、3 つの問いに解答することを求めている。問 1 は、資料 1 の要約で、フェアトレードの概念、役割などについて資料に沿って理解して的確に表現できているかどうかを評価する。問 2 は、同じく資料 2 の要約で、フェアトレードに対する反対論に焦点を絞って資料の論旨を理解できているかを問う。問 3 では、3 つの資料を踏まえて、大企業によってフェアトレードが行われること、特に日本でそう認識されていることが、フェアトレードをより拡大する上で、プラス要因となると考えるか、それともそうならないと考えるか、受験生の意見を求めている。これで受験生の洞察力、思考力を判断することをねらいとしている。

### <答案の特徴と傾向>

#### 問 1

資料 1 の内容を要約する問題であった。比較的読みやすい文章でもあり、必要な論点は概ね押さえられていた。しかし、自由貿易と公正貿易のいずれかに記述が偏っていた解答が少し目立った。公正貿易の認証基準の特徴 4 点が端的にまとめられるかを狙った部分では、一部のみ記述、そもそも認証基準と認識していない記述も見受けられた。

## 問2

資料では反対意見が明確に示されていたが、それをきちんと把握し提示できていない答案が少なくなかった。また、自分の意見を述べている答案が複数枚あった。

## 問3

下線部で書かれていることがフェアトレードを促す要因になるかどうかを設問で問うているが、大企業＝悪という図式で是非を論じて、議論がずれている答案が多く見られた。また、資料1を踏まえて書いている答案が少なく、自分の体験だけで議論している答案も見られた。

## ◆ 経済学部 前期日程（英語・数学）

### 英語

#### <出題の意図・ねらい>

##### I、II

基本的な文法の知識と語彙力を有しているか、それらを活用してやや複雑な構文を解釈することが出来るかを見る。文を超えたレベルで文脈を踏まえて英語を理解できているかを見る。

##### III、IV

与えられた日本語の文を適切な表現を用いて文法的に正しい英語に訳すことが出来るかを見る。

#### <答案の特徴と傾向>

##### I、II

全体としては、単語の意味を文脈に応じて適切に訳せていないことに起因すると思われる不自然な解答が目立った。

特に、Iの間3問4では、訳文が日本語になっていないものが散見され、IIの間4では、somehowを文脈を理解した上で訳出できていない答案が多く、itの指示対象が何かを理解して訳している答案が少なかった。また、問5では、whoseを理解していない答案が多く、controversialの意味が適切に訳せていない答案も多かった。

##### III、IV

全体として、与えられた日本語文を自分なりに解釈することをせず、そのまま英語に訳そうとしていると思われる答案が多かった。

特に、IIIでは、「求める」に適切な訳語が与えられておらず、「精神の発達」の訳出にも困難を感じているようであった。IVでは、「日本以外の多くの国では」の部分が正しく訳されておらず、frogのスペルミスが目立ち、jumpとfly、pondとriverを混同していると思われる答案が多かった。

### 数学

#### <出題の意図・ねらい>

本学の数学入試では、基本的な問題が出題されています。いわゆる難問は出題されません。基本的な定理や公式の理解力と論理的な思考力を試すのがねらいです。単なる暗記力や計算力よりも、問題の分析能力と的確な判断力や工夫する力を見るのがねらいです。また、出題の範囲に十分注意してください。

## <答案の特徴と傾向>

### 問題 1

この問題は数列の基本的な知識を問う問題ですが解答率は低めでした。(1)(2)は数列と数列の和の関係性が分かれば容易に解ける問題だと思います。正答率は高めでしたが、添え字の範囲に注意できていない解答が多くありました。(3)では解法は合っている途中で計算ミスをしている解答が多くありました。(4)は数学的帰納法を用いると証明できますが、正しく証明できている解答は多くはありませんでした。(5)は公式を使うと容易に求められますが、(3)の解答が間違っていて(5)も誤りというケースが多々見受けられました。

### 問題 2

微分と積分に関する基本的な問題です。(1)はグラフの対称性をどのように調べるかが分かっていたら容易な問題です。(2)は接線と交点を求める基本問題ですが、計算ミスが多く見受けられました。(3)は関数の最大値と最小値を求める問題ですが、変数の範囲に注意しておくことが大切です。(4)は3次関数が極値を持たない条件ですが、関数のグラフを十分に理解しておくことが大切です。(5)は関数で囲まれた図形の面積を求める基本問題です。関数の大小に注意しておけば大丈夫ではないでしょうか。微分や積分を用いた表現では、式とグラフとの関係を確実に対応づけて日頃から勉強しておくことが大切です。

### 問題 3

対数の演算とそれを用いて、桁数や最高位の数などを求める問題です。(1)はほとんどの受験生ができていましたが、ここで間違えている人もいました。(2)の解き方は簡単ですが、計算が少し大変だったでしょうか。(3)は桁数に関する基本問題です。(2)をヒントに考えれば分かりやすかったと思います。(4)は、具体的に計算すれば、すぐに法則が見つかります。(5)は公式を覚えているか、または、条件を式にして求めればできますが、手強い問題でほとんどできていませんでした。

### 問題 4

この問題は、比較的シンプルな確率と期待値の問題です。(1)～(3)はそれぞれ確率、期待値、金額に関する条件の整理の基礎的な問題であり、題意の取り違えやミスは散見されましたが、全体的によく解けていました。(3)をヒントにすれば、条件を整理して確率を求める(4)と(5)もシンプルに解けるようになっていますが、無関係に数え上げて解こうとしている答案が多く見られました。特に(5)は数え上げて解くことはできますが、条件の見落としや数え間違いが多く、数え上げで正解している答案は決して多くありませんでした。

## ◆ 経済学部 後期日程 (小論文)

### <出題の意図・ねらい>

今回は、『貧乏人の経済学』からの出題である。世の中を豊かにすることを目的とする経済学は、貧困と戦う方法についても考えなければならぬが、それを貧乏な人の実態に則して考察するという内容のものである。

問1は、課題文の内容を正確に把握してまとめる力を見る問題で、問2は、さらに発展的に論理を展開し、具体的な方策を述べる問題である。

### <答案の特徴と傾向>

本文の内容を十分把握し、具体的な、実現可能な方策に言及している答案が少なく、総じて点数は低かった。

## ◆ 文学部比較文化学科 前期日程（総合問題）

### <出題の意図・ねらい>

問題Ⅰでは、主として英文読解能力、問題Ⅱでは英語表現能力を問う。

問題Ⅰ：広島への原爆投下で弟妹を失った母をもつ筆者が、フォークナーの小説に出会い、そこに描かれた南部社会と被爆地広島の共通点を見出すことでフォークナー研究者の道を歩むさまが回顧されている。文章の流れを正確につかみ、問題文のテーマを理解できているかを見る。

問1【選択問題】基本的な英単語の知識について問う。

問2【読解】やや複雑な長文の構造を正確に理解できているかを問う。

問3【英文和訳】下線部だけではなく、文章全体を理解できているかを問う。

問4【読解】広島への原爆投下で弟妹を失った母の息子である筆者が、20世紀初頭のアメリカ南部社会を描くフォークナーに強い関心をもった理由を正確に把握できているかを問う。

問5【選択問題】英文の理解力を問う。

問6【読解】出題文全体を正確に理解し、第一段落にある解答を探することができるかを問う。

問7【英文和訳】仮定法が含まれていることに気づいたうえで、正しく訳しているかを問う。

問8【英文和訳】出題文のテーマを理解し、正しく訳しているかを問う。

問題Ⅱ：英語の語彙力、慣用表現の理解、英文構成能力、英文法に関する習熟度を総合的に問うための和文英訳の設問。分かりやすい英文に訳されているかを見る。

### 問題Ⅲ：現代文（論理的文章）

本に関する随筆集の中から、「読む」という体験に焦点を当てた文章を選んだ。小説に描かれた架空の町をめぐる話題は様々に展開するが、「読むことから得られる体験と実体験は全く別のものである」という筆者の主張は一貫している。この主張を、惑わされることなく論の展開から把握できるかどうかを問う問題となった。

問一 「予習を重ねる」という言い回しが、具体的に何を意味するのかを読み取る問題である。日常的な言語運用能力を問うた。

問二 美食小説の読者が実際の食事より小説の方を重視する理由を問う問題である。実体験は読書から得られる体験の代替にはならないという点を読み取れるかどうかを問うた。

問三 論旨の根幹が読めているかどうかを問う問題である。併せて「桃源郷」という言葉の意味を理解しているかという語彙力、要求された文字数で論述するという文章推敲能力を問うた。

### 問題Ⅳ：国語表現に関する問題

問一 漢字書き取り問題。昨年度に引き続き、平成22年度に文科省より示された新常用漢字に対応し、そこから出題している。日常的に用いる漢字を、正確に書くことができるかどうかを問うた。

問二 慣用表現の問題。これも日常的によく用いられるものから出題し、言葉への関心の度合いを問うた。

問三 副詞を用いた作文の問題。「副詞」「単文」など、高校生までに学ぶ日本語文法の基礎事項が理解できているかどうかを重視した。

## <答案の特徴と傾向>

### 問題Ⅰ

問1 正解率は9割近かったが、アのAtlanticやオのPersianという誤答が散見された。

問2 問題は平易な部類に入る。the fact is that...のthat以下の文章をまとめることが要求されている。しかし、かなりの答案がこの構文を理解せず、「事実」を前段あるいは後段の文と関連付ける解答が目立った。直訳風の文章のため、日本語として通じないものも見受けられた。

問3 仮定法過去完了の訳出に関しては正答率が高かった。“so”が指し示す内容に関しても正答率が高かった。一方で、“million”を「10億」、「1億」などと、また、“soldiers”を「市民」、「政治家」などと誤訳した答案が目立った。

問4 フォークナーの描くアメリカと筆者の故郷である広島の様子が似ていると筆者が感じたという点については、多くの受験者が把握できていたが、フォークナーの小説の革新性にまで言及できたものは少なかった。またわずかであるが、方向を指す言葉を誤って理解しているものがいた。

問5 ほとんどの受験者が正解で、オのStillなどを選んだ者がごく少数いた程度であった。

問6 比較的よくできていたが、ignoranceを「無関心」「無視」と訳す解答が散見された。

問7 倒置によって仮定法の条件文が作られており、難しいかと思われたが、半分程度の学生が満点を取っていたようである。

問8 with regard de...は難しかったようで、正しく訳せた学生は数えるほどであった。In some mannerはmannerを「方法」と訳すかどうかで学力を判別するのに有用であった。

### 問題Ⅱ

基本的な英文法がわかっていないものが目立った。また基本的な英単語のスペルが正確にかけていないものも多かった。とりわけ(2)については、日本語の意味をしっかりと理解しないまま、部分、部分を順に訳してしまったために、日本語の意味を正確に伝えられていないものもあった。

### 問題Ⅲ

問一 「予習」を「想像」という言葉におきかえることができている答案は多かった。一方で、「重ね」という部分に対応して「繰り返し」という意味の言葉を入れることができている答案は少なかった。

問二 美食小説から得られる快樂と現実に食事をすることは全く別の体験である、という点は正しく読解できている解答が多かった。しかし、「なぜ」食事を抜くのか、という部分の説明が疎かになった答えが多かったのは残念である。現実の食事は読書から得られる快樂の代替にはならないというところまで読み込んでほしかった。

問三 「文中の表現」を踏まえて、「筆者の考え」をまとめる問題である。キーセンテンスを読み取れている受験者は半数を超えた。だが、「桃源郷」を含む比喻表現をそのまま用いて書き抜くだけで、筆者の考えを具体的に説明していないものについては減点している。説明を求められている場合は、できるだけ具体的な内容をこたえてほしい。また、今回は「1000字で」という推敲能力を問う問題にもなっていたが、これについては、字数が不足しているものが多く、減点対象としている。

### 問題Ⅳ

問一 殴り書きのような解答があり、その場合、突き抜けてはいけない箇所が突き抜けていたり、点を打つ位置が誤っていたりして、点数を出すことができなかった。

また、全体的に漢字の学習が充分でない印象を受けた。

問二 ①と⑤の正解率が低かった。

問三 「つぶさに」の意味がわかっていないため、過半数が誤答であった。代表例は「即座に」のように誤解したもの。「つぶさに恋をした」などという不可解な答案も多数。

## ◆ 文学部人間関係学科 前期日程 (小論文)

### <出題の意図・ねらい>

この本で著者は、人間性の進化を動物行動学から解き明かそうとしている。とくに著者が注目しているのは「共感」に関する能力であり、霊長類から人類まで脈々と続く他者に対する共感の事例を、進化論的な視点から説明している。

出題に用いた章では、公平性について論じられている。著者によれば、共感や同情の領域においては、人間は自動的に無条件に他者のことを気にかけるようにできているが、こと公平性に関しては、他者志向性はそのほんの一部にしか見られず、おもな感情は自己中心的なものである。こうした性質を持つ人間が、公平な社会関係を実現するためには、さらにもう一つの段階が必要となる。

それは他者との協調をうながす能力である。たとえ制度や思想的な背景がなくても、人は他者の存在を認め共同行動の成果を分け合わなければならないときに、不正を禁じ公平性をもとめるように進化してきた。

こうした人間の他者への認知能力の進化論的な理解によって、人間関係の基盤となっている文化や社会など、さらに複雑な人間の営みに目を向けるきっかけとしてほしいと考え出題した。

提示された英文は決して難しくはないが、正確に読み込めないと解答は出来ない。問1と問2は問3を考える上でのヒントとなっている。問3については問に沿った具体的な社会行動の事例をとりあげ、こうした行動からどのような社会システムや人間関係が生じるかが、論理的に記述されていればそれを評価する。

### <答案の特徴と傾向>

全体的に多くの文章を読み込み理解しなければならなかったため、解答に時間がかかったと思われるが、そのぶん理解度の差が明確にあらわれた。たとえ英文を十分に理解できていなくても、問われている内容から論述すべき課題をよみとり構成された解答のなかには、一定の水準をみとすものもあった。対照的に問いの意図を十分に理解していない答案に関しては、妥当性の観点から低い評価とならざるを得なかった。採点においては問いに対して正確に解答した上で、さらにほかの人とは違った独創性を持ち、証拠となる具体的事例とそこから導き出される結論との論理関係に説得力のある答案が高く評価されている。

問1は、英文の読解力が必要となる問題である。本文を読み取れていれば答えられる問いであるが、はじめから解答を諦めているケースがおおく差がついている。

問2は、日本語をうまく要約できれば解答できるだろう。さらに最後の英語の内容も踏まえて、資源の分配という社会性に言及できた答案については高く評価した。共感と公平性のメカニズムの比較について求められているにもかかわらず、両者を混同した答案も多かった。

問3は、最後通牒ゲームを理解できていないと的確な具体例がだせないためそこで解答に差がついた。具体例も抽象的なものが多く、もう少し身近な事例から考えると書きやすかったかもしれない。またオリジナリティは論文においては重要な評価の観点となる。小論文の最後の「どのような人間関係を生じさせるのか」という問いはまさに、解答者の独創的な論考を期待して提示されているものであるが、そこまで言及されている答案は限られていた。

## ◆ 文学部比較文化学科 後期日程（小論文）

### <出題の意図・ねらい>

#### 問1

問題文から必要な情報を取り出してまとめる力を問うており、なおかつ要領よく的確に比較の整理をすることが求められている。クリップと他の文房具との間には、思考方法と深く関わるという共通点がある。では、ゼム・クリップはそうしたクリップのなかでどのような位置づけにあるのか。他の文房具とクリップがどのように比較され、さらにクリップ全般のなかでゼム・クリップがどのように位置づけられるのかを、段取りよくまとめられるかどうかポイントとなっている。

#### 問2

普段なにげなく過ごしている日常生活を振り返って、ユニークな発想で例を挙げられるか、なおかつ解答を論理的に構成できるかを問うている。

「編集」とは、複数の情報を結びつけたり、加工したりして、新たな情報へとまとめる行為を指している。小さな子どもが母親に体験を話すという事例が挙げられているように、生活の様々な局面に「編集」の効力が関わっている。人間は、情報を自ら「編集」して理解したり伝えたりし、一方では「編集」された情報を受けとめているのである。本文中では、「編集」のあり方次第で、情報環境がまったく異なった相貌になってくると述べられている。「編集」という言葉は、生活のなかのさまざまなコミュニケーション（共同作業、情報のやりとり）を考えるためのきっかけになると言っている。そうした読解をもとに、「編集」の影響（有効性あるいは問題点）を論じてほしいというのが、出題のねらいである。

### <答案の特徴と傾向>

#### 問1

筆記具とクリップとの基本的違いは概ね説明されているが、ゼム・クリップの構造的特徴について説明したものが少なかった。また、特徴の説明が求められているのに対して、クリップの歴史やその意義を書いたものが目立った。

#### 問2

自由な発想で編集例を出せているものが少なかった。また、具体的な例を挙げず一般論に終始したものや、同じ内容を無駄に繰り返して論が進まないものも見られた。一方で、編集が個人をこえて、情報の共有につながっていくことが論じられている解答など、効果・影響について説得的に説明できてきているものもあった。

## ◆ 文学部人間関係学科 後期日程（集団面接・グループ討論）

### <面接の意図・ねらい>

後期日程の試験は、数人の受験生による集団討論に基づいて行われる集団面接である。テーマを設定した討論場面において、自分自身の見解をテーマに沿って論理的・独創的に表現できる力、情報提供や意見調整など円滑なコミュニケーションを進める力、集団の中で適切なかたちでリーダーシップを発揮していける力などを見ていきたいと考えている。

これまでさまざまな討論テーマに基づき集団面接をおこなってきたが、ときおり賛否に別れたまま討論が進展せず膠着するケースがあった。そこで今年度から、討論の論点と課題内容をより具体的に明示し、賛否をたたかわせるというよりは、むしろアイデアを出し合うことであたらしい知見に到達できるような問題解決型のテーマを意図した。

なお、討論テーマはあくまでも上記の能力評価のために設定されたもので、テーマに対する意見そのものの是非を評価するものではない。

## <受験生の特徴と傾向>

討論のために事前に提示される情報が多く、例年以上に正確な文脈の読み取りを要求される課題となっている。何を討論すべきかという課題の意図が十分に読み取れていない受験生も散見された。しかし、設問にしたがって具体例をイメージし、それをもとに論理を構成する小論文むけのトレーニングを日頃からしてきた受験生にとっては、むしろ論点が明確であり対応しやすかっただろう。

課題で求められていた建設的な議論というのは、必ずしも肯定的な考えのみを求めているわけではなく、むしろ討論の中で批判的な視点を加えながら知見を深めていくことが期待されている。同じテーマをあたえられても、時間内で最終的に到達できた討論内容にはグループ間で明確な差が現れ、それらが総合的な評価に反映されている。

## ◆ 法学部 前期日程（小論文）

### <出題の意図・ねらい>

#### （１）出題文選択の背景

出典は、平川秀幸『科学は誰のものか 社会の側から問い直す』（NHK 出版、2010 年）である。本書は、この 40 年の間に「夢と希望」から「社会問題」へと姿を変えた科学技術を、どう「舵取り」していくのか、そしてその舵は「誰が」取るのかが今問われているという課題設定のもと、暮らしに深く関わる科学技術の問題を具体的に挙げながら、政府と企業、住民といった様々なアクターが参加する意思決定について考察を深める科学技術社会論の入門書である。出題文は、『統治』から『ガバナンス』へと題する章のなかから、「ガバナンス」の意味と背景について述べた箇所を抜き出したものである。

出題文で筆者は、20 世紀後半から進んだ社会の複雑化・多様化・グローバル化により、従来の「統治者」である政府の能力だけでは問題に対処しきれなくなったことを理由に、社会全般においても、また科学技術の分野でも「統治からガバナンスへ」という考え方に変化してきていると述べ、政府や専門家のみならず、民間企業、NGO・NPO、一般市民などの多様なアクターが社会の舵取りや科学技術の発展を目指して協働する現状を紹介している。本書は 2010 年に公刊されたものだが、翌年の東日本大震災以後、例えば原子力発電の安全性といった科学技術の問題がひろく社会的な課題として議論されるなど、現実には科学技術と「ガバナンス」という視座はいっそう重要性を増していることから、本出題文を選択した。

設問は、筆者の言う「ガバナンス」の意味と背景を受験生が要約したうえで、一般市民として「ガバナンス」を実践するにあたっての留意点は何かを問うものである。出題文中にある事例など、解答のヒントは多く示されているものの、実際に自分が「ガバナンス」に携わっていることを想定して見解を示すのは、やや難題であるかもしれない。しかし、法律や政策を学ぶにあたり、「ガバナンス」は重要な概念であり、現代社会のあり方について考える契機として、あるいは社会問題を解決に導くひとつの手法として、先入観なく出

題文の要点をとらえ、理解し、かつ受験生自身の言葉で自分の考えを論述してもらうことが本出題のねらいである。

## （２）受験生に何を望むのか

第一に、文章の読解力・理解力が求められる。出題文での「ガバナンス」の意味とその背景について、筆者の記述を十分理解したうえで、ポイントをまとめることが必要である。

第二に、筆者の説明をふまえたうえで、ガバナンスの実践について、自分の考えを論理的・説得的に述べることを求められる。

### <答案の特徴と傾向>

設問は、①「ガバナンス」の意味と、この言葉が広く使われるようになった背景を要約したうえで、②実際に一般市民として「ガバナンス」を実践していくにあたり、気をつけなければならないことは何か、についての受験生自身の考えを述べることを求めるものである。

①について言えば、課題文は比較的平易であり、「ガバナンス」の意味と背景について、多くの受験生はポイントを押さえた上で上手に要約することができていた。しかし、②は、受験生にとって比較的難題であったように見受けられた。一般市民として「ガバナンス」を実践するうえで気をつけなければならないことについて、平板で画一的な記述にとどまる答案が目立っていた。例えば、(i)コミュニケーションの重要性を指摘する答案、(ii)少数意見の尊重を指摘する答案、(iii)知識や情報の獲得能力の向上を指摘する答案、(iv)対立を避け協調する必要性を指摘する答案などである。

それらの答案は、やや表面的な指摘のみにとどまってはいるものの、一応は設問の形式を踏まえていた。問題設定そのものが受験生にとっては難しいという事情もあったために、設問の形式を踏まえたそれらの答案は、一応の評価を得ることとなった。しかし、中には、設問の形式を踏まえずに論じている答案もあり、それらの答案は低い評価を得るにとどまった。「気をつけなければならないことは何か」についての自らの考えが問われているということを、全く無視して論じている答案などが、それに相当する。

全体としては、②の難易度が比較的高かったということもあり、自己の見解を展開する際の具体例の用い方などにより、答案間での得点の差が生じたと言することができる。例えば、特定秘密保護法などの時事問題を適切に具体例として援用することにより、論理的・説得的に論じることに成功している答案などは、比較的高い得点を得ることとなった。

答案の字数そのものは、きちんと埋まっている答案が多かったが、中には要約ばかりが多過ぎる答案や、逆に要約が少な過ぎる答案などもあった。概して言えば、①と②の論述の量的バランスが不適切な答案は、低い評価を得るにとどまった。なお、原稿用紙の使い方の基本を踏まえていない答案や、語彙力の不足が目立つ答案も散見された。また、誤字や脱字も多く見られた。

## ◆ 法学部 後期日程（面接）

### <面接の意図とねらい>

法学部では、一般選抜後期日程試験において、面接による選抜試験を実施している。面接を実施している理由は、単にセンター試験の成績のみで入学者を選抜するのではなく、対話形式により社会的問題関心などを問うことにより、幅広い素養を持った学生を選抜するためである。

したがって、面接にあたっては、①法学部学生として必要とされる社会に関する基礎的知識と社会的問題関心および論理的思考能力、②面接試験におけるプレゼンテーションのやり方やコミュニケーションの能力などを中心として評価している。

なお、限られた時間内での質問であるため、勉強意欲や目的意識、志望理由などについては、今年度は独立した質問としてではなく、社会問題についての質問への受け答えのなかで総合的に評価することとした。

### <受験生の特徴と傾向>

面接試験では2問を出題した。いずれも受験生の社会的問題関心、論理的思考力と表現力などの適性をみるための、社会問題に関する質問である。ひとつは「一票の格差」をめぐる問題、もうひとつは「尊厳死」についての問題である。

第1問目の「一票の格差」問題は、高校までに学習する日本の選挙制度に関わる問題であり、また近年注目される最高裁判決や国会の対応なども報道されていたため、ある程度答えやすい問題ではないかと予想していた。しかし実際には、それがどのような問題かを適切に説明できずに、面接担当教員からの「助け船」を必要とするような受験生も多く見られた。現行の選挙制度自体を十分に理解していなかったり、投票率や死票の発生、単なる議席数の多寡の問題などと混同したりする回答が多かった。また、この問題についてどのように考えるかについても、反対意見に対して論理一貫性をもって反論できる受験生は少なかった。これに対して、問題の所在を適切に説明した上で、自分の住む地域と絡めたり、日本社会の課題と結びつけたりして回答するなど、高く評価できる受験生も一部見ることができた。日常的に政治に対する関心を有しているか、またそこで取り上げられる課題を精確に理解しようとしているかといった取り組みの差違が、得点差につながったように感じられる。

第2問目は、最近の社会問題の一つといえる尊厳死について、受験生が常日頃どのような関心及び考えをもっているのかを問うものである。身近な人の死に接した経験のある受験生はある程度は自分なりの考えを述べたが、尊厳死の意味についてほとんど理解していない者もいた。全般的に、尊厳死がどのような法的問題をもつかについて、的確な回答は少なかった。また、反対意見について、論理的、多角的な反論ができる受験生も少なかった。日常的に議論となっている社会的問題について、それが法律的な面からはどのような意味をもつか、常日頃関心を有する姿勢を持つことが望ましい。

## ◆ 地域創生学群 前期日程（小論文）

### <出題の意図・ねらい>

今回の試験の出題文は、これまでとは少し傾向を変え、地域を創生する人材に求められる力に関連した文章の中から、次の3点を念頭に置きながら選定しました。1点目は、地域創生やまちづくりを考える上で重要な人材の在り方に関連した文章であること、2点目は、地域創生学群において学生に育てほしいと考える能力に関連した文章であること、3点目は一般選抜であることを考慮して、一般的、かつ、平易な文章であることです。複数の候補を検討した結果、伊賀泰代（2012年）『採用基準』ダイヤモンド社、の当該箇所が、上記選定基準に鑑みて最も適当であると判断し、出題文として選定した次第です。

今回の出題文では、地域を創生する上で必要な「リーダーシップとは何か」がテーマとなっています。リーダーシップとは「役職とは異なる」というところから話を始め、現代社会においてリーダーシップが求められる背景が説明されています。そして、リーダーシップとは誰でもトレーニングをすることで十分に身につけ、発揮することができるということが述べられています。これらは、地域創生学群におけるいずれのコースを志望する受験生にとっても、地域創生に求められる能力や心構えをイメージしやすくなると判断しました。

設問では、上記の出題文から①リーダーシップを発揮できる日本人を増やさなければならない背景について述べ、②その数を増やすためにどうすれば良いかについて筆者の考えをもとに説明することをもとめました。また、当然ですが、論理的思考能力や説得力は解答文全体を通じて評価されることになります。

### <答案の特徴と傾向>

まず、①のリーダーシップを発揮できる日本人を増やさなければならない背景は、経済のグローバル化の中で世界中のニーズをくみ取り、製品、サービスをタイムリーに提供できることが必要となりました。その結果、分散型意思決定システムが必要となり、リーダーシップを有する多くの人材が必要となっている点の説明を求めています。さらに日本人がリーダーシップを誤解している内容を述べることも求めています。次に②のリーダーシップを発揮できる日本人を増やすためにどうすれば良いかという点については、リーダーシップとは特別なものではなく、「日常的に誰もが発揮するもの」であり、リーダーシップは、訓練によって身につく、身近なスキルであるという点について説明を求めています。

全体的に①と②について、それぞれ述べられている答案が多かったです。しかし、日本人がリーダーシップを誤解しているという点まで説明することができていなかったり、あるいは①、もしくは②のいずれか一方についてだけ述べられている答案も少なくありませんでした。

一方で、設題のポイントをしっかりと押さえ、論理的展開も踏まえたうえで、簡潔に内容をまとめ、下書きをきっちりとした上で丁寧に書かれた、大変素晴らしい答案もありました。もちろん、このような答案には高い得点がつきました。

最後に、例年のことですが、受験生の意見を求めている設問であるにも関わらず、自分の主張を述べた答案、自分の地域の活動の紹介など、出題文とはほとんど関係のない地域創生に関する事柄について述べている答案もありました。受験生には、本学地域創生学群の小論文の傾向をきちんと踏まえて、入学試験に臨んでほしいと思います。

### <面接のポイント>

地域創生学群では、実際の地域に出て様々な活動を行う実習を重視しているため、今年の集団面接では、実際の実習に近い状況を課題として設定し、それに取り組む一連のプロセスに対して評価を行うものとした。

## ◆ 国際環境工学部 前期日程

### 理科 (物理・化学)

#### <出題の意図・ねらい>

##### 【第1問～第3問 物理】

##### 第1問

フックの法則、および慣性の法則についての基礎的な知識を有し、かつその知識を用いることで物体に作用する力を正しくとらえることができるかを問う。

##### 第2問

波の性質とドップラー効果に関する基礎的な知識と理解を問う。

##### 第3問

コンデンサの電気容量や静電エネルギーに関する基礎的な知識と理解を問う。

## 【第4問～第6問 化学】

### 第4問

酸塩基反応を題材に、化学平衡に関する基本的な知識を問う問題である。併せて、平衡定数や濃度の計算を通じて数値計算能力があることを確認している。

### 第5問

理想気体の性質や理想気体と実在気体の差について問う問題である。問3では、風船が浮く時には風船と風船中の気体Aの質量の和が同体積の空気の質量と等しいことを見抜けるかどうかのポイントである。

### 第6問

有機化合物および有機化学反応の基本的な知識と、正答に至るまでの論理的な思考力を求める問題である。

## <答案の特徴と傾向>

## 【第1問～第3問 物理】

### 第1問

慣性力とばねの関係を組み合わせた基本的な問題だったが、ほぼ満点に近いか、もしくはほぼ0点かの2極化が激しかった。特に問題であったのは、ばねののび量がマイナスになってしまっている(問題の条件下では $1/\cos\theta$ はかならず1以上になるのだが、それを考慮していない)間違いが非常に目立ち、結果としてほぼ全問不正解となってしまっている学生が多く見られた。また、ばねののびとばねの長さを勘違いしている、ばねの先についている小球が床と接している場合は小球には床からの垂直抗力も働くということを想定していない、などの初歩的な間違いも目立った。

### 第2問

ドップラー効果における音波の振動数、波長、周期の変化を正しく理解できていないと思われる答案が多く、全問正解の答案はいくつか見受けられる程度であった。問いの(ク)は比較的正解率が高かったものの、(コ)、(ス)の正解率は非常に低かった。

### 第3問

前半は正解率が高かったが、後半は低かった。コンデンサの電気容量や静電エネルギーに関する公式や法則を覚えるだけでなく、電気回路に適用する応用力が必要である。

## 【第4問～第6問 化学】

### 第4問

問1 電離度が小さい酸の電離定数はどのように表されるかを導く問題である。教科書にもそのまま書かれているような基本的な問題であり、完答している答案も多かった。ごく少数、ア～ウの全てに同じ式を記入している答案が見られたが、このような解答が問題を理解しているとはとても思えない。

問2 電離定数から水素イオン濃度を求める問題である。基本的な問題であり、正解が多かったが、電離度と電離定数を混同している答案も見られた。用語を単に記憶するのではなく、その定義や意味をしっかりと理解して欲しい。また、計算間違いや単位を付けていない解答も見られた。

問3 緩衝溶液の水素イオン濃度を求める問題である。典型的な問題であるが、溶液中に存在するイオン種や化学平衡について正しく理解していないと解答することはできない。どのような化学反応が起こっているかを想像しながら、化学現象を正しく理解して欲しい。また、物質量と濃度を混同した解答も見られた。このような間違いをなくすためにも、物理量は単位とともに考える習慣をつけてほしい。

問4 緩衝溶液のpHがあまり変化しない理由を問う問題である。理由を「緩衝溶液だから」とする答案が見られたが、もちろんこれは適切な解答ではない。酸や塩基を加えたときに、どのような反応が

起こるかを具体的に示しながら、pH があまり変化しない理由を論理的に説明しなければならない。

#### 第5問

- 問1 ボイルの法則およびシャルルの法則に関する内容を問うた。ほとんどの解答は問題の内容をよく理解しているようであった。
- 問2 理想気体と実在気体の違いについて問うた。理想気体が分子間力と分子自身の体積を無視していることは概ね理解しているようだったが、低温や高圧下においてそれらがどのような影響を及ぼすのかまできちんと理解し、解答したものは少なかった。現象の表面のみではなく、その背後にある原因についてまで、理解する学習が望まれる。
- 問3 有効数字の取り扱い、単位にまで考えが及んでいない解答、および計算ミスが散見された。答えに至る式を導くのみならず、計算を間違いなく行い、かつ有効数字をきちんと取り扱い、求めた数値の単位を正しく付与する必要があることを理解してもらいたい。

#### 第6問

- 問1・問2 フェーリング反応やヨードホルム反応は銀鏡反応とともに高等学校で学ぶ有機化学における3大検出反応のひとつである。名前だけでなく、検出される化学構造や、生成物の化学構造までをしっかりと学んでおかなければならない。
- 問3 エステルを加水分解したときにできるアルコールやカルボン酸の構造式を問うた。フェーリング反応やヨードホルム反応が検出する構造をしっかりと理解すること。覚えるだけでなく、論理的な思考力が必要である。
- 問4 エタノールの分子内脱水反応でエチレンが生成する反応式を書かせたが、硫酸は触媒であり、反応式には入ってこないことを理解していない答案があった。
- 問5 約半数の答案で正解が得られていた。組成式をもとに、考えられる構造をすべて書き、問題の条件に合わないものをひとつひとつ消していけば、正解にたどりつくことは容易なはず。この配点は大きく、差がついた問題である。
- 問6 構造異性体について問うたが、「構造式」を書いていないために減点となった答案があった。

### 英語

#### <出題の意図・ねらい>

#### 第1問

- 問1 不定代名詞が何を指すのか、及びその単数複数の区別が理解できているのかを問う。
- 問2 文脈から代名詞の指す内容を理解できているのかどうかを問う。
- 問3 基本的な語彙の知識があるかどうか、及び文脈から適した内容の形容詞を入れる能力があるかどうかを問う。
- 問4 やや難解な単語の意味を文脈の前後関係から類推できる能力があるかどうかを問う。
- 問5 基本的な複文構造（関係詞節）の読解力があるかどうかを問う。
- 問6 基本的な熟語の知識があるかどうかを問う。
- 問7 2つのカッコに入る共通した熟語を、両方の文脈から類推できる能力があるかどうかを問う。
- 問8 2重の後置修飾語（関係詞節）の構造を理解できているかどうかを問う。
- 問9 基本的な慣用句の知識があるかどうかを問う。
- 問10 文脈に合った内容になるように与えられた語群を並べ替える文法能力があるかどうかを問う。
- 問11 長文全体から設問で問われた内容がどこに書いてあるのかを探し、内容を与えられた字数でまとめられる能力があるかどうかを問う。

## 第2問

自分の意見を平易な英語を用いて記述する力を見る。特に語彙や構文の適切さ、文法的な英文を書く力を問う。

### <答案の特徴と傾向>

#### 第1問

- 問1 "one"は何を指しているかという問題だが、正解率が低かった。こういった"one"が前出の名詞を指す上、単数形でなければならないのに、複数形の名詞を選んだ受験生や、直後の段落から答えを探した受験生が多かった。なお、動詞や副詞を選んだ受験生も少なくなかった。
- 問2 全体的に良くできていた。ただ、「～な友達」というように、代名詞 "it" の指示対象を「人」としてとらえている誤答が見られた。
- 問3 正解率が高かった。
- 問4 これらの選択肢問題の中、正解率をもっとも低かった問題。"purchase"を選んだ受験生が一番多かった。
- 問5 正答率が大変低く、正しく訳出できている答案はほとんどなかった。動詞 "dissolve" を「～を溶かす」「～を解決する」と誤訳している答案、代名詞 "it" を正しく取れていない答案がたいへん多く見られた。
- 問6 正解率は低かった。空欄に「思い当たる」のような意味合いをもつ単語が入ることまで分かったためか、選択肢の "a" (hit=当たる) と答えた受験生が多かった。
- 問7 これらの選択肢問題の中、正解率をもっとも高かった問題。不正解として、"d" (at all) が多かった。
- 問8 文の基本的な構造をしっかりとれているかいないかが大きなポイントとなる設問であった。もっとも重要なのは、文の基本的な構造が動詞 consider で始まる命令文で、「品物について考えてみなさい」と読者に対して問題を投げかける文になっている点が理解できていたかどうかである。さらに、目的語の goods の後に続く that can be bought と whose buying and selling is morally controversial はともに関係代名詞で始まる節であり、goods に修飾しているという構造がとれていたかどうか重要な点である。誤答の中には2つめの関係詞節を間接疑問文のようにとっていたものが目立った。
- また、細かな点であるが、controversial を訳せていない解答が多く見られた。この語は決してやさしい単語ではないが、前後の文脈で「難しい問題」「お金で買えるけれども買われるべきではないものがある」「腎臓の売買」といったことが述べられていたことから推測して、「売買することが道徳的に」の後にくる言葉が何かを導き出すことが可能である。
- 問9 設問では against と対になる前置詞を尋ねる問題になっていたが、agree という誤答が散見された。Agree という動詞ではなく、for や in favor of が文法的に適切である。
- 問10 この設問では、主語の選択と自動詞・他動詞の区別が鍵となっていた。設問が含まれる段落の冒頭を見ると、お金で買えない物と、買うことはできるが買うことに議論の余地がある物の区別は一見するとはっきりしていると述べられており、設問の箇所がその後に続く。文章流れから主語は this distinction (この区別) が続くのが自然であり、それが当初思っていたよりもはっきりしないという趣旨の文になる。この「当初思っていたよりも」に相当する部分は...than it first appears となるべきところだが、...than first appears it となっている間違いが見られた。Appear は自動詞であり、目的語をとることができないことを思い起こす必要がある。
- 問11 字数制限は概ね守られていたが、極端に短いものや内容の不足する和文に意味のない挿入語句やぼかし言葉で語数を稼いでいる答案も見られた。特に、解答部分に当たる英文中の honor, recognition,

award といった語に触れずに前後の名詞から内容を類推して書いてある答案が多かった。また、例年と同じく主語の解釈ミス、「しまったり」「ような」という曖昧口調語句を無意味に入れる解答も見られた。

## 第2問

カタカナ語の「マナー」は正しくは manners であるがほとんど受験生が単数で書いていた。また、若い乗客のことをただ、young や younger、「大声で」は loud voice というべきを big voice という誤答も多く、女性の化粧も正しく put on makeup, do their makeup と言っている受験生もほとんどいなかった。主張を示す should, need, や一般的な人々を表す we, they, people を主語にした英文を書く練習が必要と思われる。

## 数 学

### <出題の意図・ねらい>

#### 第1問

数学Ⅰ、数学Aに関する基礎学力を確認する。二次関数、三角比、場合の数、根号を含む式の計算、確率・期待値について出題している。

#### 第2問

数学Ⅱ、数学Bに関する基礎学力を確認する。複素数、直線の方程式、三角関数、指数関数、数列について出題している。

#### 第3問

数列および積分法に関する問題。数列の和および定積分の計算、はさみうちの定理、極限值についての理解と応用力を確認している。

#### 第4問

空間のベクトルに関する問題。ベクトルの大きさおよび内積の計算、平面上のベクトル方程式、ベクトルの垂直条件についての理解を確認している。

### <答案の特徴と傾向>

#### 第1問

基本的な知識が身についているかを問う問題であったが、正答率にばらつきが生じた。問題ごとに比較すれば、三角比に関する(2)の正答率、根号を含む式の計算である(4)の正解率がやや低かった。

#### 第2問

計算量も少なく基本的な学力を問う問題であったが、全問正解者は1割程度と少なかった。(4)の指数関数の変数範囲を理解してない解答が目立ったが、他の問題は(1)、(2)の正答率が多少高かった程度で大きな違いはなかった。

#### 第3問

- (1) 等比級数の公式を適用する基本問題で、受験生の正答率は高かった。一方で、符号を間違える計算ミスが散見された。
- (2) 積分を不等式で評価する証明問題。4問の中で最も難しく、完答者は少なかった。数学的帰納法でアプローチし、 $n=1$  の場合の証明まで完成させた受験生も、少数であるが見られた。
- (3) 定積分の問題。(2)、(4)よりも難易度が低いので、正答者は(2)、(4)に比べて多かった。しかしながら、出題形式が通常の定積分の問題と若干異なったためか、予想よりは正答者は少なかった。また計算ミスが多く見られた。数学的帰納法でアプローチした受験生が多く見られたが、 $n=1$  の証明ができているものの、 $n=k$  から  $n=k+1$  を導く過程を正しく記述している受験生は少なかった。

(4) はさみうちの定理、極限値の計算。(1)、(2)、(3)の結果を利用すれば比較的容易に答えを導くことができる。しかし、(1)、(2)、(3)までに時間がかかりすぎたためか、(4)に挑戦し正答した受験生は少なかった。

#### 第4問

問題の正答率は全体平均で60%程度であり、ほぼ予想通りであった。(1)、(2)が8割以上の正答率、(3)、(4)の正答率がやや低い結果となった。(3)は(2)をもとに方程式をたててそれを解き、座標を求める過程を確認する問題であったが、計算量の多い問題であり、方程式を解く、座標を求める過程で計算ミスが多かった。(4)は(3)で求めた高さをもとに体積を計算する内容であったため、(3)が正解の場合は正答率が高かったが、(3)の計算ミスにより(4)の計算も間違えていることも多かった。

### ◆ 国際環境工学部 後期日程 (数学)

■機械システム工学科 (第3問選択A、B、Cの中から2問選択)

■情報メディア工学科 (選択)

■環境生命工学科 (選択)

#### <出題の意図・ねらい>

##### 第1問 (第3問 選択A)

- (1) 2次関数の最大値・最小値に関する基本的な知識を問う問題である。
- (2) 2次不等式に関する基本的な知識と演算能力を問う問題である。
- (3) 組み合わせ数に関する基本的な知識を問う問題である。
- (4) 三角形の面積と内接円・外接円に関する基本的な知識と演算能力を問う問題である。

いずれも基礎能力の確認を狙っており、正解かつ迅速に解答することを期待した。

##### 第2問 (第3問 選択B)

ベクトルと空間図形に関する設問である。高度な知識や発想を問う問題ではなく、空間のベクトルに関する基本的な知識と論理的な思考力を確認する問題である。

##### 第3問 (第3問 選択C)

全体として積分の基本的な理解を確認する問題となっている。

- (1) 分数式の不定積分を問う基本的な問題である。ここで、場合分けに気付くかで、理解の程度を判断する。
- (2) (3)への導入である。ここで要求するのは、整式の変形であり、基礎的なことである。
- (3) (1)、(2)の結果を利用して、見た目が複雑な式の定積分を問う問題となっている。部分分数への分解は(2)の結果を利用すれば容易に求めることができ、それ以降の計算は基本的な積分である。

#### <答案の特徴と傾向>

##### 第1問 (第3問 選択A)

基本的な知識と計算力を問う問題。いずれも正解率が高かった。

##### 第2問 (第3問 選択B)

ベクトルの内積や垂直条件、空間における直線や平面などの基礎事項の理解度は比較的高かったが、(3)において条件から四面体の高さを導き出せたものとそうでないものと大きくわかれた。また、座標軸や座標平面を正しく理解できていない答案も見られた。

### 第3問（第3問 選択C）

- (1)  $1/x$  型の不定積分ケースに対して、 $\log|x|+C$  となる基本的な項目を落している受験生がほとんどであった。
- (2) 恒等式の話であり、ほとんどが基本的な解法は理解しているが、単純な計算ミスによる失点が若干見られた。
- (3) (1)と(2)の結果を利用すると容易に解ける問題となっており、その意図が理解できている受験生はかなり良くできていた。しかし、この問題中に(1)の間違いに気付く状況があるにもかかわらず、それに気付いていない受験生も数多く見られた。

## ◆ 国際環境工学部 後期日程（物理）

- 機械システム工学科（第1問、第2問）
- 情報メディア工学科（選択）
- 環境生命工学科（選択）

### 物 理

#### <出題の意図・ねらい>

##### 第1問

運動保存の法則と力学的エネルギーの関係についての基礎的な知識を有し、それらの知識を用いて、2つの物体の衝突による運動の変化を計算することができるかを問う。

##### 第2問

凸レンズによってできる像の大きさや位置レンズの公式を用いて正しく求めることができるかを問う。

##### 第3問

磁界の中を動くコイルに生じる誘導起電力やローレンツ力に関する基礎的な知識と理解を問う。

#### <答案の特徴と傾向>

##### 第1問

振り子の運動と2物体の衝突を複合した問題であったが、振り子の運動と物体の衝突の基本を理解しており、やや複雑な数式を丁寧に解答している学生が多く、全体的に正答率は高かった。

##### 第2問

全体的に正解率は高く、全問正解の答案も散見された。問いの(サ)、(セ)などで、レンズの公式から得られる値を与えられた座標系に変換せずそのまま解答するなど、問題文をよく読んでいないと思われる答案も多く見受けられた。

##### 第3問

物理を選択する受験生は極めて少なかったが、選択した受験生の正解率は高かった。典型的な問題であり、受験生にとっては容易であったと思われる。

## ◆ 国際環境工学部 後期日程（化学）

- エネルギー循環化学科
- 環境生命工学科（選択）

## <出題の意図・ねらい>

### 第1問

- 問1 化学の基礎知識を問う内容である。
- 問2 硫黄について、原子構造、酸化反応およびその反応生成物の性質、さらに、硫酸の工業的な製造方法とそれに関する計算について問う内容である。
- 問3 結晶構造の基礎知識とそれに関する計算について問う内容である。

### 第2問

水素とヨウ素の反応を題材として、化学反応や反応速度などの基礎を問う問題である。

- 問1 活性化エネルギーと反応条件の反応速度への影響に関する基礎問題である。
- 問2 化学反応に係わる生成速度や平衡定数に関する知識を問う計算問題である。

### 第3問

アルコールやアルデヒドなどの含酸素有機化合物に関する基礎知識と、それらを組み合わせて化学物質を決定していく応用力を問う内容である。

- 問1 アルコールの酸化などの反応結果から化合物の構造を決定する基礎的な問題である。
- 問2 水素結合に関する知識を用いて、官能基の異なる化合物の沸点を推測する問題である。
- 問3 エステル化反応とヨードホルム反応の知識を問う問題である。
- 問4 同上。
- 問5 酸化・付加・脱水などの反応結果から生成物を推測する問題である。
- 問6 同上。熱量保存の法則の理解を問う基本的な問題である。

## <答案の特徴と傾向>

### 第1問

選択問題に対しては正解率が比較的高かったが、問2の計算問題に関しては正解率があまり高くなかった。結晶構造に関する問題に対して、配位数の正解率がかなり低かった。

### 第2問

基礎知識の有無を単に質問する問1の正解率は高かった。しかし、問2の計算問題の正解率、特に問2の3以降の問題の正解率が非常に低かった。

以上から、知識の記憶は一定レベルであるが、知識の理解、特に、数式を用いた理解が不十分であることが伺える。

### 第3問

- 問1 基礎的な問題であり、正答率は高かった。
- 問2 アルコールとエーテルの沸点の違い、カルボン酸とアルコールおよびアルデヒドとの沸点の違いについての理解を問う問題であったが、正答率は低かった。
- 問3 ヨードホルム  $\text{CHI}_3$  の化学式を「 $\text{CH}_3\text{I}$ 」とする誤りが多かった。
- 問4 エステル化を「けん化」とする誤りが多かった。
- 問5 1,2-ジブロモプロパンの名称を正確に表記できていない答案が多かった。
- 問6 正答率は低かった。

## ◆ 国際環境工学部 後期日程（生物）

### ■ 環境生命工学科（選択）

## <出題の意図・ねらい>

### 第1問

DNA が持つ遺伝情報がどのようにタンパク質の合成に利用されるのかについて、基本知識の理解を問うとともに、これらの生物由来の高分子がどのような構造をしているかについての理解度を問う問題である。

### 第2問

細胞の成り立ちと働きおよび働きを調節する仕組みについて、またその歴史的背景について正しく理解しているかを問う問題である。

### 第3問

生物の進化および進化と密接な関係にある生物集団の遺伝についての理解を問う問題である。特に、進化論をめぐる歴史的論争の要点と簡単な計算をさせることで具体的な知識の正確さを問う問題となっている。

## <答案の特徴と傾向>

### 第1問

DNA の情報がタンパク質の合成に利用されるまでの、生物の遺伝情報に関する基本知識と上記の生物由来の高分子がどのような構造をしているかについての理解度を具体的な例題を通じて問う問題であったが、正答率は高かった。

### 第2問

細胞の分化、筋細胞の構造や筋収縮の調節に関する問題であったが、全体的によく理解していたと言える。細胞培養や筋細胞の構造に関する穴埋めや筋細胞の収縮に関する問いの正答率は概ね高かった。一方で、細胞説の内容や、骨格筋の多核化のメカニズムについての理解度は不十分であり、概念や現象に対して興味をもつことが一層期待される。

### 第3問

さまざまな進化説について説明する問題については、概ね正答率が高かったが、現在の進化説から見た問題について指摘できた受験生はほとんどいなかった。またハーディワインベルグの法則を用いた問題では、平易な計算問題であったが、理解できている受験生が少なかった。

## ◆ 国際環境工学部 後期日程（面接）

### ■ 建築デザイン学科

## <面接の意図・ねらい>

グループ面接および個別面接・口頭試問を行った。グループ面接は受験生を5名程度のグループに分けて行った。

- ・木造住宅に住みたいか、RC造住宅（コンクリートの家）に住みたいか
- ・他の受験生の意見

に対して質問し、回答を求めた。個別面接・口頭試問では、

- ・自己PRおよびその内容
- ・建築における窓の役割
- ・建築デザイン学科で学ぶ目的

に対して質問し、回答を求めた。これらの質問を通じて受験生の思考力および意欲などを確認した。

## <受験生の特徴と傾向>

受験生の傾向は例年とほぼ同様であった。グループ面接では8割程度の受験生が木造住宅を支持した。なかには木+RCの住宅を提案した受験生もいた。窓の役割に関する質問に対しては千差万別の回答があった。

# 平成 26 年度入試の出題の意図、採点総評 《推薦入試》

## ◆ 外国語学部英米学科 推薦入試（全国：面接）（地域：小論文）

### I 全国推薦

#### <出題の意図・ねらい>

英語で自分の考えや意見を表現することができ、平易なコミュニケーション活動を行うことができる。

#### <解答の特徴>

受験生はすべて TOEIC スコアなど条件を満たしていることもあり、期待に十分応える応答をすることができていた。

### II 地域推薦

#### <出題の意図・ねらい>

英語の学習の到達度をみるために、次の三点を考慮して出題している。

①辞書を使って文脈に即して、単語の意味を適切に判断する。②日本語で表現する場合、その訳文が「わかる」日本語になっているかを考える。③自分の意見を述べる時に、論理的な組み立てをする。

具体的には、問一では、キーワードを的確に捉えて、自身の理解内容を簡潔にまとめられるかを問うている。問二、問三では、英文を読むために必要な構文に関する理解があるかを問うている。問四では、議論のテーマについて自分の主張する内容を論理的に構成する仕方を問うている。

#### <答案の特徴と傾向>

##### 問 1

殆どの受験生が問題文の要旨を理解できていた。唯、日本語でその内容をどう表現するかに関しては、中心テーマに沿って内容をどのようにまとめるかの取捨選択の仕方では理解度の差が見られた。

##### 問 2

主語は何か、単語の意味が分かっているか、so...that...構文がきちんと訳せているかといった基本的なことを問う問題である。出来は、悪くなかった。

##### 問 3

全般的によく出来ていた。people をどう訳すのか、また、動詞 wonder との関係で what 以下の目的語の部分はどう訳すかで差ははっきり出ている。

##### 問 4

殆どの受験生は英語で長めの文章を書くことができていた。より優れた答案の特徴をあげると、自分の個人的な体験が要領よく、織り込まれている。議論の組み立て方に対する対策はできているが、質問の内容と合っていない答案も散見された。

## ◆ 外国語学部国際関係学科 推薦入試（小論文）

### <出題の意図・ねらい>

問題文は幸福度と経済的豊かさとの関連性について各国の事例から考察した英文であり、資料1は経済成長戦略と幸福度との関連づけに慎重な議論を紹介した記事である。問1では、英文による筆者の主張を正確に読み取れているかどうかを確認する。問2では、経済指標と幸福度との関係、また、幸福度を指標にして経済政策を策定することの妥当性について、問題文と資料の論点の違いを整理して論じる力をみる。

### <答案の特徴と傾向>

#### 問1

英語による文章を指定の字数で要約する問題であった。英文は平易で、議論の主旨はおおむね理解できたようであった。しかし、基本的な単語力が不足していたようで、文と文の繋がりを正確に把握できなかつたり、さらには全体の主旨と矛盾する記述があったりするなど、不十分な内容になっている解答が多かった。また、結論まで十分に訳しきれなかった解答も見られた。

#### 問2

問題文と資料の双方を活用し、2つの論点についてそれぞれの主張の違いと根拠を問うた。出題の意図を的確に把握した解答も少数あったが、多くは問題文を正確に読んでいないように見受けられた。日本語資料だけを論じるなど2つの資料の比較になっていない解答、問われていないのに自分の意見を述べた解答、英語の問題文の内容を誤解していた解答などが目立った。誤字・脱字は比較的少なかったが、指定字数に達していない解答が例年より目立った。

## ◆ 経済学部 推薦入試（小論文）

### <出題の意図・ねらい>

出題は竹内洋著の「教養主義の没落」（中公新書、2003年）の一部を採用した。

若干、硬めの文章だが、論理的思考能力を試したいという意図からこの著書を選んだ。問1は、読解力を問う問題とした。社会科学の論理的な文章を理解し、自ら構築できる能力を試した。問2は、文章の内容を理解し、自らの考えを論理的に表現する能力を試した。

### <答案の特徴と傾向>

問1の答案からは硬めの文章を読解できたかどうか、はっきり読み取れた。問2では、問題文とはかけ離れた、あらかじめ用意していた内容を回答している答案がみうけられた。

## ◆ 文学部比較文化学科 推薦入試（小論文）

### <出題の意図・ねらい>

#### 問題Ⅰ

問題文は、ヨーロッパ諸国を、時間に対する意識によって2つの類型に分け、それぞれの特徴を説明するとともに、現代社会が、より「時間にうるさく」なっていることを指摘し、その結果として起こる変化について論じたものである。ヨーロッパの比較文化論であると同時に、現代文化論ともなっている。

問1 重要なキーワードの1つである「時間を気にしない」社会について説明している適切な箇所を見つけ出し、日本語で要約することを求めている。英文全体の理解と日本語の文章力・構成力を問うことがねらいである。

問2 「時間にうるさい社会」と「時間を気にしない」社会との比較を、具体例に即して説明している箇所を見つけ出し、その部分を日本語で要約することを求めている。問1と同様、英語の読解力及び、日本語の文章力・構成力を問うことがねらいである。

問3 現代社会の傾向についてまとめた箇所を要約するよう求めている。該当箇所を見つけ出すことはそれほど困難ではないが、要約する内容は問1・問2に比して、若干複雑になっているため、英語の正確な読解を問う比重が大きい。

問4 問題文を適切に理解した上で、現代文化についての自身の考えを英文で述べることを求めている。英文の構成力はもちろん、英文の内容を考えるために必要な発想力をも問うことがねらいである。

#### 問題Ⅱ

ユネスコによって認定される「世界遺産」は、その国や地域の歴史・文化の代表とも言えるものであるが、今回の問題文は、近年における世界遺産選考基準の変化、人々の美的感性や価値観の変化、そして「負の遺産」の問題を中心に論じたものである。

問1は、問題文全体を読んで筆者の考えの重要点を正確に読み取り、それを自分の言葉でまとめる力があるかどうかを見る問題である。

問2は、時代と共に価値観も変化するというテーマを、既成概念にとらわれず柔軟に考察できるか、また自らの意見を論理的な文章で表現できるかを見る問題である。

### <答案の特徴と傾向>

#### 問題Ⅰ

問1 満点に近い回答例は少なかったが、平均的には6割ほどのできだった。社会の特徴でなく、人の性格や行動、具体的な国名で説明している回答例が目立った。

問2 “time-bound society”と”time-blind society”を日本語で説明する事に関しては比較的良く出来ていたが、約束に遅れてくる人間を「知識がない」「意志が強い」「貧困である」「高い能力がある」とする誤答がし

ばしばみられた。

問3 求められているのは、“time-bound society”化する社会の一般的变化を抜き出して訳すことであったのだが、具体例で用いられているイギリスのケースをそのまま詳述してしまう誤答がしばしば見られた。とはいえ、満点を取れた学生も少なからずいたので、良問と言えよう。

問4 英文の趣旨を理解した上で、自身の意見を英語で書くことが求められる問題であるが、社会がますます時間に縛られていくことを著者が肯定しているとみなすものなど、英文の趣旨そのものを理解していない答案が多く見られた。また、英文そのものについては、文法的な間違いはさほど多くなかったものの、単純なスペルミスがよく見られた。

## 問題II

問1 近代の廃墟の遺産化／審美化について、可能・不可能の両方の理由を要約する問題であるが、文章全体を要約しようとするものが目立った。加えて、前後の文章のつながりが悪く、論旨の通らない解答も目立った。また、可能である理由の大きな要素としてユネスコの基準変化があげられるが、触れられていない解答が多かった。また、不可能である理由として、概ね廃墟は負の遺産であるという点を答えられていたのはよかったが、それが現在にも続く問題であり、遺産化／審美化は廃墟の抱える問題を過去のものとして処理しようとする動きであることに言及できているものは非常に少なかった。

問2 ただ単に価値観の転換が起こったのみ述べるのではなく、価値観の転換がなぜ起こったと考えられるのか、あるいは価値観の転換により、どのような変化がおこったのかといった点に言及しつつ丁寧に論理的な展開をこころがけている答案が少なかった。また、具体的事例についても、本文と類似した例になっている答案がみられ、それゆえに筆者の意見の引き写しになり、自らの観点が十分に述べられていないものがあった。全体として、500字を書ききることができている受験者が多かったのはよかったが、論じるというよりは、知っていることを羅列し、説明しているだけのものも多かった。ある事例や現象について、複数の視点からじっくりと考察されている答案の評価が高くなった。

## ◆ 文学部人間関係学科 推薦入試（小論文）

### <出題の意図・ねらい>

文章1の出典は、アメリカの2人の心理学者によって執筆された“trauma and transformation”という本である。この本の中から、重大なトラウマを体験した人々の抱える問題とそこからの回復をめぐる課題について記述している部分を引用した。

文章2は、多くの小学生と教員が津波の犠牲になった「大川小の悲劇」によって夫を失った小学校教員の妻が震災から1年5カ月後に書いた手記から抜粋したものであり、深刻なトラウマ体験をした筆者がその体験とその中での思い、そして願いを綴ったものである。

この二つの文章から、トラウマの与える影響と、そこからの回復のプロセスに必要な課題を整理していくと同時に、さらに進んで、このトラウマ体験の問題について、小論文として自分自身の見解をまとめあげる能力を問うたものである。

### 問1

英文を正確に読み取り、この問いに対して筆者が結論づけているところを見つけて正確に読解できる力を問うた問題である。

### 問2

問いに対して、英文の中からこの問題に言及しているところを見つけて要約できる力、そして、日本文の筆者の手記を読みながら、トラウマ体験をした人々がトラウマ体験を個人の中で受容し、立ち直っていくために必要な観点を考察できる力を問うたものである。

### 問3

二つの文章の趣旨を踏まえたうえで、トラウマ体験に関する自分の意見を小論文として自由に記述する課題である。様々な観点からのアプローチがあると思われるが、最も一般的な例で言えば、トラウマ体験をした個人がその体験を受容し、もう一度自分の人生を取り戻していくために、周囲の人間ができることは何なのか、を説得的に論述した論文、などが考えられるであろう。もちろん、この問題に対してどのような観点から切り込むかは受験生に委ねられているが、論文としてのまとまりや説得力、独創性などを評価していく。

## <答案の特徴と傾向>

### 問1

英文を的確に読解し、問いの部分に該当する箇所をきっちりと捉えた解答が少なかった。英文読解に必要な英語力の不足が感じられた。

### 問2

解答を導き出すのに必要となる英文の該当部分を的確に捉え、その意味を正確に理解して解答している答案がきわめて少なかった。

### 問3

課題文のトラウマという言葉をも十分に理解できないまま論述されており、安易に自分の身近な「失敗体験」として議論が進められ、論述の深まりが乏しいと感じられた。

他者のサポートが必要という提案にとどまり、それを表現する困難さまで理解していない答案が多かった。

## ◆ 法学部 推薦入試（小論文）

### <出題の意図・ねらい>

出典は、杉田敦『政治的思考』（岩波書店、2013年）である。本書は、「決定」、「代表」、「討議」、「権力」、「自由」、「社会」、「限界」、「距離」という八つのテーマを切り口にして、政治の基本問題に関する筆者の見解を平易に解説したものであり、出題文は、この中から「自由」について説明した箇所を抜き出したものである。

出題文は、権力や政治との関係において自由をどのように理解すべきか、という問題を設定して、これを、①自由対権力・政治と、②自由のための権力・政治という構図の中に位置付けて議論を展開している。少子高齢化や所得格差の拡大が進展する中において、政治の役割が問われてきているが、筆者は、自由の条件を根本的に問うことを通じて、政治の役割を模索することを試みている。

自由の把握の仕方は多岐にわたり、これをどのように把握するかについて、多様な見方がこれまで提起されてきているものの、筆者は、次の二つの視点から自由の条件に接近する。一方において、権力の現象としてみることができる政治は、自由を制約する機能を持つために、自由は政治や権力と対立するものとして把握されるべきであるという見方があり、これは、無政府状態こそが真の自由を実現するという視点に通じる。他方において、自由であるためには少なくとも生活できる状態でなければならないという見方があり、これは、あらゆる人に最低限度の生活を保障する政府の権力活動を自由の条件として要請する。筆者は、自由の中にある権力・政治との対立的契機と補完的契機を指摘しながら、自由と権力の対立的関係のみを強調するのではなく、自由の前提条件としての権力や政治の存在に目を配るべきであると主張している。

上述したとおり、少子高齢化や所得格差の拡大がみられる状況の中で、個々人の真の自由を実現する政治の役割が問われてきている。こうした問題状況にかんがみ、社会科学における基本問題である「自由」の在り方を政治と関係付けながら検討する出題文を選択した。出題文を参考にしながら、受験生が自由と政治の関係をどのように把握するかを問うところに、出題のねらいがある。

### 【受験生に何を望むのか】

出題の意図は、①「自由」と「権力・政治」の相互関係を考察する出題文を読解し要約する力、②「自由」と「権力・政治」の相互関係について思考する力を問うことにある。①については、出題文の内容を理解し、自分の言葉で要約する力が、②については、筆者の見解を繰り返すだけでなく、筆者の見解を踏まえて、自分の見解を論理的、説得的に展開する力が要求される

### <答案の特徴と傾向>

設問は、①「自由」と「権力・政治」の対立的関係と補完的関係についての筆者の見解を要約したうえで、②それに対する受験生自身の見解の記述を求めるものである。

①について、筆者の主張は、次のような論点を含んでいる。(i)政治による権力活動は、自由の条件として必要であること。(ii)同時に、政治による権力活動は、選挙結果以外を無視してしまうということがないように、抗議の声（「抵抗としての自由」）に開かれていなければならないこと。(iii)また、政治的な変化の正しさは、自由を実現するという目的（「目的としての自由」）に即して把握されなければならない、自由の行使は無秩序や抑圧体制を導くようなものであってはならないこと。

上記の論点のうち、(i)については、多くの受験生はある程度は要約できていた。しかし、(ii)や(iii)に関しては、うまく言及できていない答案が多かった。その意味では、読解力に関しては、受験生の間に差が出た。ただし、概して言えば、読解力が弱く、要約の記述も短すぎるという傾向が見られた。

②については、筆者の見解に賛同する答案が多く、筆者の見解に説得的に反論するものはあまり見られなかった。すなわち、筆者の見解に同調しつつ、社会保障やセーフティネットの必要性を説く答案が多かった。その点では、生活保護、ワーキングプア、限定正社員、非正規雇用などの具体的な論点、あるいは特定秘密保護法案やアラブの春などの時事問題に絡めながら論じている答案などが、比較的高い得点を得ることとなった。

ただし、答案の中には、筆者の見解をそのままなぞっているだけのものもあり、また、自己の見解と筆者の見解の要約とのつながりを、論理的に示すことができていない答案も少なくなかった。概して言えば、論の構成力が弱いという傾向が見られた。

全体としては、課題文の難易度が比較的高かったということもあり、読解力と自己の見解を展開する際の実例の使い方などにより、答案間での得点の差が生じたと言いうことができる。なお、答案の字数そのもの

は、きちんと埋まっている答案が多かったが、文章力という点では、主語と述語の対応関係の不備が目立っていた。また、誤字や脱字も散見された。

## ◆ 国際環境工学部エネルギー循環化学科 推薦入試（総合問題・面接）

### 総合問題

#### <出題の意図とねらい>

##### 第1問

環境配慮型自動車の環境性能を評価することを題材に、飽和炭化水素の燃焼反応の知識や単位の理解度と、簡単な数学を組み合わせでの論理的思考能力を問うた。

問1 天然ガス自動車の燃料タンクのカス容量と走行距離より、1 km あたりの二酸化炭素排出量を求める問題である。

問2 ガソリン車の1 km あたりの二酸化炭素排出量を求める問題であるが、問1とは異なり燃費から計算できることに気づくかを問うた。後半の天然ガス自動車と同じになる燃費を求める問題は方程式を立てれば容易に計算でき、数学的能力を問うた。

問3 天然ガス自動車とガソリン車の消費エネルギーを比較する問題である。与えた燃焼熱の単位を正確に理解しているか、問1、問2の答えから物質量を計算できるかを問うた。

##### 第2問

問1 電池に関する基礎知識を問う問題である。

問2 マンガン電池、ダニエル電池および鉛蓄電池の3種類の電池が放電する場合に、電極や電解質溶液がどのように変化するかを問う問題である。

問3 水酸化ナトリウムの電気分解に関する基礎知識を問う問題である。

#### <答案の特徴と傾向>

##### 第1問

全体的に、物質の状態をよく理解できておらず、単位の換算もできていなかった。オクタンの化学式等の化学の基礎知識も不十分である。2種類の車の性能を比較する問題で、計算で得られた2つの数値が3桁も異なっても疑問に思わず、単位の換算ミスに気づかないままになっている答案が多かったのは残念である。論理的思考力をもっと養って欲しい。

問1 計算方法までは正しい答案が多かったが、体積の単位の換算 ( $\text{m}^3$  と L) ができていないものが多く、最終的な正答率は25%であった。

問2 (1)の正解者はいなかった。ほとんどが液体と気体の区別ができておらず、問1と同じ解き方をして誤答を得ていた。また40%の答案でオクタンの化学式が間違っていた。

問3 片方だけ正解できた答案でも20%しかなかった。

##### 第2問

問1 正答率は高かった。ボルタ電池のような代表的な電池については、電解質として用いられる物質や、正極、負極で起こる反応は記憶しておきたい。

問2 正答率は半分以下であった。電池反応ではイオン化傾向の大きい金属が負極、小さい金属が正極になることは理解しているようだが、それぞれの極で起こる酸化還元反応により、どのような変化が起こ

るかまで理解しておいて欲しい。

問3 正答率は半分程度であった。電気分解では、陽極、陰極のそれぞれで起こる反応をよく理解しておくことが重要である。そうすれば、それぞれの極で発生する物質だけでなく、その比まで理解できるはずである。

## 面接

### <面接内容>

最初に、本学科に志望した動機、入学後にやりたいこと、将来の進路などについてプレゼンテーションさせた。その後、エネルギーや環境汚染など環境に関する質問や、基礎的な化学についての質問をしながら、本学での修学意欲、基礎学力、コミュニケーション能力などについて評価した。

### <受験生の特徴と傾向>

面接は、事前に準備し、記憶してきたことを一方的に話す場ではないので、面接官の質問をよく聞き、うまくコミュニケーションをとることが重要である。また、はっきりした、聞きやすい声での受け答えに好感を持つのは確かであるが、必要以上に大きな声で話す必要は無い。

志望動機や将来の進路に対する回答はよく準備されていたが、受験生が本当にそう思っているのかと疑問に感じる回答が多かった。インターネットで簡単に集められる情報をつなぎ合わせて作られた回答より、自分自身の体験に基づく、実感のこもった回答の方が好感が持てる。

なお、推薦入試では本学での修学意欲も評価しているが、大学入学後の修学のためには一定レベル以上の学力は必須である。意欲だけでなく、基礎学力も十分につけて受験して欲しい。

## ◆ 国際環境工学部機械システム工学科 推薦入試（総合問題・面接）

### 総合問題

#### <出題の意図とねらい>

第1問（数学）

教科書に書かれている基礎的な内容がしっかりと身につけていることを確認すること。

第2問（数学）

微分法を応用して関数の概形が書けることと、方程式とグラフの関係を正しく理解しているかを問う基礎的な問題。

第3問（物理）

問1 エネルギー保存の法則の基礎を確認する問題とした。

問2 熱量の保存の基礎を確認する問題とした。

問3 レンズを利用した顕微鏡の基礎的な内容を確認する問題とした。

#### <答案の特徴と傾向>

第1問（数学）

問1の正答率は非常に高かったが、それ以外の問題は正答率が高いとはいえない結果であった。どれも基本的な問題である。受験生には十分な復習を期待したい。

## 第2問 (数学)

問1の増減表はよくできていた。問2では接点を極小点と思い込んで誤っている答案が見受けられた。問3では直線と3次関数の曲線の交点を正しく把握できていない答案が目立った。総合すると中程度のできであった。受験生には方程式とグラフの関係を正しく理解するように努力して頂きたい。

## 第3問 (物理)

問1 力学的エネルギー保存の法則について問う問題であり問題ア～エの正答率は概ね高かったが、問題オの正答率は低かった。

問2 熱量の保存により比熱や温度を求める基礎的な問題であるが、問題カ、キ以外の正答率は低かった。

問3 レンズを利用した顕微鏡の基礎的な内容を確認する問題であり概ね正答率は高かったが、問題サ～ソの正答がほとんどない解答も多く見られた。

## 面接

### <面接の形態>

受験生22名に対し、1人6分程度の個人面接を実施した。

### <面接内容と意図>

#### (1)志望理由等に関する質問

機械システム工学科を志望する動機について質問し、学科についての理解度、機械工学への学習意欲、学科への適合性などを見極める。さらに、コミュニケーション能力を確認する。

#### (2)物理と数学に関する質問 (口頭試問)

機械工学を学ぶ上で不可欠な基礎学力 (物理、数学) の理解度とその表現力を確認する。

#### (3)卒業後の進路に関する質問

大学卒業後の進路について質問し、機械工学技術者に対する意識を確認する。

### <受験生の特徴と傾向>

志望動機に関しては、指示した時間内で説明できる受験生が多かった。学科の教育方針に沿った「ものづくり」、「環境問題」などに関連させた回答や、教員の研究分野に興味を持っているといった回答が多く、事前に学科について調べていることが伺えた。

物理と数学の基礎的質問に対しては、短い時間ではあったが、論理的な回答をすることができるか否かによって、機械システム工学科に適しているのかを判断することはできた。論理的にゆっくりと説明できる受験生と、おそらく法則や数式を暗記しているだけでほとんど説明ができない受験生の差は明らかであった。

卒業後の進路に関しては、明確に答える受験生に比べると、志望動機を繰り返し、卒業後の進路についてほとんど考えていない受験生の方が若干多かった。

## ◆ 国際環境工学部情報メディア工学科 推薦入試（総合問題・面接）

### 総合問題

#### <出題の意図とねらい>

##### 第1問（数学）

教科書に書かれている基礎的な内容がしっかりと身につけていることを確認すること。

##### 第2問（数学）

微分法を応用して関数の概形が書けることと、方程式とグラフの関係を正しく理解しているかを問う基礎的な問題。

##### 第3問（物理）

問1 エネルギー保存の法則の基礎を確認する問題とした。

問2 熱量の保存の基礎を確認する問題とした。

問3 レンズを利用した顕微鏡の基礎的な内容を確認する問題とした。

#### <答案の特徴と傾向>

##### 第1問（数学）

問1の正答率は非常に高かったが、それ以外の問題は正答率が高いとはいえない結果であった。どれも基本的な問題である。受験生には十分な復習を期待したい。

##### 第2問（数学）

問1の増減表はよくできていた。問2では接点を極小点と思い込んで誤っている答案が見受けられた。問3では直線と3次関数の曲線の交点を正しく把握できていない答案が目立った。総合すると中程度のできであった。受験生には方程式とグラフの関係を正しく理解するように努力して頂きたい。

##### 第3問（物理）

問1 力学的エネルギー保存の法則について問う問題であり問題ア～エの正答率は概ね高かったが、問題オの正答率は低かった。

問2 熱量の保存により比熱や温度を求める基礎的な問題であるが、問題カ、キ以外の正答率は低かった。

問3 レンズを利用した顕微鏡の基礎的な内容を確認する問題であり概ね正答率は高かったが、問題サ～ソの正答がほとんどない解答も多く見られた。

### 面接

#### <面接内容と意図>

- (1) 本学科を志望する動機、将来のビジョンなどについて質問し、学科の教育内容に対する理解度や就学意欲などを確認した。
- (2) 数学の基本問題に関する学力口頭試問では、必要に応じてヒントを与え、総合問題で確認できない受験生の持つ本来の実力と問題を解決する思考能力を引き出そうとした。

## <受験生の特徴と傾向>

- (1) 志望動機については、明確な回答が得られた。教育内容に対する理解については、学科の教育方針と研究分野に沿った回答であり、時間をかけて調べて練習したことがうかがえた。将来の進路については、具体的なビジョンを持っている受験生とそうでない受験生があった。
- (2) 口頭試問については、点数差がやや大きく、解法を思い出す受験生と計算ミスがあつてうまく説明できない受験生に分かれた。

## ◆ 国際環境工学部建築デザイン学科 推薦入試（総合問題・面接）

### 総合問題

#### <出題の意図とねらい>

##### 第1問（数学）

教科書に書かれている基礎的な内容がしっかりと身につけていることを確認すること。

##### 第2問（物理）

問1 力学的エネルギー保存の法則について問う問題であり問題ア～エの正答率は概ね高かったが、問題オの正答率は低かった。

問2 熱量の保存により比熱や温度を求める基礎的な問題であるが、問題カ、キ以外の正答率は低かった。

##### 第3問（造形）

問1 建築のデザインを行う上で基礎的な素養として必要な立体的な空間の認識力・想像力、三次的な表現力、スケッチによる描写力等の総合的な造形力を見た。

問2 与えられたテーマに対して的確に題意を捉え、自らの見解を的確に述べているかを問う問題である。特に、想像力、発想力、論理的思考力、文章表現力を見た。

#### <答案の特徴と傾向>

##### 第1問（数学）

問1の正答率は非常に高かったが、それ以外の問題は正答率が高いとはいえない結果であった。どれも基本的な問題である。受験生には十分な復習を期待したい。

##### 第2問（物理）

問1 力学的エネルギー保存の法則について問う問題であり問題ア～エの正答率は概ね高かったが、問題オの正答率は低かった。

問2 熱量の保存により比熱や温度を求める基礎的な問題であるが、問題カ、キ以外の正答率は低かった。

##### 第3問（造形）

問1 写真の建物がどのような立体であるかを想像し、異なった角度から描き出すことによって、立体的な空間の認識力、想像力、スケッチ力等を見た。異なる角度からの描写に関しては、ある程度、立体感覚があることが伺える答案は多かったが、形態の概形、プロポーションがとらえきれていないものも多かった。素材感の表現ができていないものは少なかった。

問2 写真に写っている建物形態から、どのような場所で使われ、何のために建てられたかを想像し、

説明することによって、想像力、発想力、論理的思考力、文章表現力を見た。回答のなかには、形態とテクスチャーから創意工夫のある回答を試みた事例もみられたが、日本語としての文章表現に問題のある回答もみられた。

## 面接

### <面接内容>

10分程度の個別面接を行った。

- ・ 高校生活の充実度や実績・積極性に関する質問
  - ・ 環境問題に関する質問
  - ・ 本学科の教育目的・内容の理解度および学科への適合性を確認するための質問
  - ・ 「建築」に対する興味や意識の高さを確認するための質問
  - ・ 本人の長所を確認するための質問
- などに対し、回答を求めた。

### <受験生の特徴と傾向>

- ・ 各質問に対して、論理的に回答できた受験生と、できなかった受験生がいた。できなかった受験生には、無理やり自己PRを交えて回答する傾向がみられた。
- ・ 学科の特徴および建築の質問に対して、ほとんどの受験生が事前に良く調べており、本学科で学びたいという意欲が強く感じられた。
- ・ 学科の特徴の質問に対して、パンフレットやホームページの記事を丸暗記した回答が多かった。記事の解釈を自分の言葉で説明して欲しかった。
- ・ 建築の質問に対して、例年より個性的な回答が多かった。

## ◆ 国際環境工学部環境生命工学科 推薦入試（総合問題・面接）

### 総合問題

（第1問 必須）

（第2問 A、B、C から1題選択）

### <出題の意図とねらい>

第1問

環境配慮型自動車の環境性能を評価することを題材に、飽和炭化水素の燃焼反応の知識や単位の理解度と、簡単な数学を組み合わせでの論理的思考能力を問うた。

問1 天然ガス自動車の燃料タンクのガス容量と走行距離より、1 km あたりの二酸化炭素排出量を求める問題である。

問2 ガソリン車の1 km あたりの二酸化炭素排出量を求める問題であるが、問1とは異なり燃費から計算できることに気づくかを問うた。後半の天然ガス自動車と同じになる燃費を求める問題は方程式を立てれば容易に計算でき、数学的能力を問うた。

問3 天然ガス自動車とガソリン車の消費エネルギーを比較する問題である。与えた燃焼熱の単位を正確に理解しているか、問1、問2の答えから物質量を計算できるかを問うた。

## 第2A問（物理）

問1 エネルギー保存の法則の基礎を確認する問題とした。

問2 熱量の保存の基礎を確認する問題とした。

## 第2B問（生物）

問1 基本的な用語や事柄についての問題で、文章で説明する能力と基礎知識を試すことをねらいとした。

問2 生物体の部分の基本的な名称を問う問題で、その形状を含めて正しく理解しているかどうかを試すことをねらいとした。

## 第2C問（化学）

問1 電池に関する基礎知識を問う問題である。

問2 マンガン電池、ダニエル電池および鉛蓄電池の3種類の電池が放電する場合に、電極や電解質溶液がどのように変化するかを問う問題である。

問3 水酸化ナトリウムの電気分解に関する基礎知識を問う問題である。

## <答案の特徴と傾向>

### 第1問

問1の正解率は4%であった。計算方法が正しい解答は40%強あったが、ほとんどが体積の単位の換算（ $m^3$ とL）ができていなかった。問2は(1)の正解者は10%で、また40%はオクタン $C_8H_{18}$ の化学式が間違っていた。問3で片方でも正解できたのが10%であった。

全体的に、物質の状態や単位的基本がほとんどできていない。飽和炭化水素の燃料を問う問題は過去もよく出題されているが、メタンの化学式さえ理解できてない解答も少なからずあり、基礎学力の低さおよび受験準備の不十分さも指摘せざるを得ない。また、第1問は車の性能を比較する問題であるが、答えの数値が3桁も異なっても疑問に思わず単位の換算ミスに気づかないままの解答が非常に多く残念であった。論理的思考力をもっと養って欲しい。

## 第2A問（物理）

問1 力学的エネルギー保存の法則について問う問題であり問題ア～エの正答率は概ね高かったが、問題オの正答率は低かった。

問2 熱量の保存により比熱や温度を求める基礎的な問題であるが、問題カ、キ以外の正答率は低かった。

## 第2B問（生物）

問1 (1)の基礎事項を説明させる問題では、説明が不十分である答案や、文章の意味が不明確な答案が目立った。完答はなかった。(2)と(3)の基礎知識を問う問題では、よく理解している者と理解が不十分な者との差が大きかった。完答は少なかった。

問2 名称に関してはよく出来ていたが、形状の図示に関しては曖昧なものが目立った。

## 第2C問（化学）

問1 正答率は高かった。ボルタ電池のような代表的な電池については、電解質として用いられる物質や、正極、負極で起こる反応くらいは記憶しておいて欲しい。

問2 正答率は半分以下であった。電池反応ではイオン化傾向の大きい金属が負極、小さい金属が正極

になることは理解しているようだが、それぞれの極で起こる酸化還元反応により、どのような変化が現れるかまで理解しておいて欲しい。

問3 正答率は半分程度であった。電気分解では、陽極、陰極のそれぞれで起こる反応をよく理解しておくことが重要である。そうすれば、それぞれの極で発生する物質だけでなく、その比まで理解できるはずである。

## 面接

### <面接形式と内容>

4人または5人のグループに対して30分程度の面接を行い、基礎学力、修学意欲、コミュニケーション能力、人物、その他の項目について評価した。基礎学力についての質問は、数学、理科の分野でこれまでに学んだ中で特に興味を持った項目、用語を受験生自身に挙げさせ、どのような点に興味を持ったのか説明を求める形式とした。

### <受験生の特徴と傾向>

志望動機および本学での修学意欲に関する質問に対しては、皆よく準備された回答をしており、大きな差はつかなかった。学力についての質問に対しても、数年間同じ形式で行っているためか、多くの受験生は事前に準備していたようだ。しかしほとんどの場合、興味の対象として、色の変化のような表面的な現象を挙げるに止まっており、なぜそのようなことが起こるのかに興味を持ち、さらに深く探求する姿勢が見られた受験生はいなかった。推薦入試では、特に本学科で学びたいという意欲の強い者をとりたいと考えているので、単に教科書に書かれている用語を憶えるだけでなく、興味を持ったことを自分で深く学習するような生徒に受験して欲しい。

## 平成 26 年度入試の出題の意図、採点総評 《AO入試》

### ◆ 外国語学部英米学科 AO入試

#### <出題の意図・ねらい>

- 1、英文読解力と講義の聴解力を見る問題。日本におけるクリスマスを扱った英文はやや難易度が高いが、その分、講義を良く聴いて内容理解に努めているかが評価のポイントである。
- 2、模擬授業担当教員の説明を頭に置きながら英文を読み、設問に正確に対応した解答を英文で論述する問題である。
- 3、模擬授業担当教員の説明を正しく聴き取り、その上で、自分の考えを論理的に述べる事が出来るかどうかを見る問題。語学力を超えた総合力を判断する問題である。

#### <答案の特徴>

- 1、文章を読むことに専念しすぎ、模擬授業担当教員の説明をあまり考慮しない答案が多かった。優秀な答案は、教員の説明にもとづいて文章を再読するところからスタートしていた。
- 2、完答できた答案は意外に少なかった。模擬授業担当教員の説明を正しく理解して英文を読み、設問に対応した解答をすることが高得点につながった。逆に、設問とずれた解答をした場合は当然点数が非常に低くなった。
- 3、完答できた答案はあまり多くなかった。優秀者はこの部分でもよい答案を作っていた。英語で論じることは確かに難しいかもしれないが、自分の考えを英語で論述することにもっと慣れておく必要がある。

#### <二次試験面接のポイント>

一次試験において英語の読解力および論述力を見ているので、二次試験では、口頭で意見を述べる力を見ることと、今後英米学科で学習していく上での適性を判断することがポイントとなった。受験者はいずれも高い能力と適性を示していたが、入学枠の制約があり、上位者のみを合格とせざるを得なかった。

### ◆ 地域創生学群 AO入試

#### <出題の意図・ねらい>

今回のAO入試一次試験では、様々なテーマを検討した結果、くらしを見る視点を学ぶという観点から、ある高齢者の事例を読み、福祉の専門職であるソーシャルワーカーであれば生活史をどのように理解するのかを取り上げました。一見すると福祉領域のみのテーマのように思われがちですが、地域マネジメントコースや地域ボランティア養成コースにおいても必要とされる視点でもある点を強調し、地域活動を行う上でもどのような視点を持つことが大事なのかを学ぶような模擬授業の内容としました。

特に地域創生学群では、自らが課題に取り組み、考え、教員から話を聞いて再度考え、学びを深めるという学習プロセスが中心となっています。そこで今回は、高齢者の事例を読むことを通して、実際にワークシートに基づいて作業を行い、その後に講師から解説を聞き、学びを深めるという今までとは異なる手法を採用しました。

設問では、ソーシャルワーカーの視点として重要なことは何かを、授業内容からまとめることを求めました。授業内容の論点を抽出した上で、①その情報を取捨選択して論点を整理することができるかどうか、②整理した論点の相互関係を考えて論理的な解釈をすることができるかどうか、という2点を評価の際の主なポイントとしました。

### <答案の特徴と傾向>

全体の傾向として、模擬授業で示した論点、特にソーシャルワーカーとして重要な視点についてはしっかりと把握できている答案が多く見受けられました。また、模擬授業において、論点として提示したキーワードの理解を促すために付記した枝葉の説明を長々と書いてある答案もありました。このような答案は、相互関係も含めて適切に説明できていない答案となっていました。

一方、各論点の相互関係を理解した上で、または熟考した上で、模擬授業の内容全体を総括できている答案も中にはあり、そのような答案は高く評価されました。

### <集団面接>

集団面接では、地域創生学群における実習をはじめとした様々な活動をチーム単位で実践することを想定した際に必要となる能力の有無を見極めることを狙いとした。

### <個人面接>

個別面接では、日々の様々な経験や体験から何かを学びとろうとする学習能力、常に目的意識を持って何かを身に付けようとする主体性の有無について見極めることを狙いとした。